

天草方言で読む【方丈記】 鴨長明 鶴田 功〈意識〉

鴨長明かものちようめいによって書かれた鎌倉時代の文学作品である。日本中世文学の代表的な随筆とされ、約100年後に執筆された吉田兼好の『徒然草』、清少納言の『枕草子』とあわせて日本三大随筆とも呼ばれる。

〈原文〉

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
淀みに浮かぶ泡沫うたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例ためしなし。

川ん水は絶えんばって、かちゅうて、同じ水があるわけじゃなか。
のんびり漂うとる泡ぶくじゃったっちゃ、弾けたり他とくっちいたりして、延々と現状維持しちゃうらん。

世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉しきの都の中にむねをならべいらかをあらそへる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。

人間じゃったっちゃ、そん人間の住み処っちゃ、世の中だいたいそがんしたもんばい。きらびやかな、こん都で、身分の高っか人も低っか奴も自分の家屋敷ば見せびらきゃーとる。なるほどそがん家は、親から子に、子から孫にと引き継がれとるごて見ゆるばってか、詳しく調べれば、昔からあるごたる伝統家屋はほとんど無か。

或はこそ破れてことしは造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれにおなじ。

去年壊れたところれ新たに建てた家てろん、昔は豪華じゃったばって小もう落ちぶれた建物ばかり。そこに住む連中も同じじゃろもん。

所もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

景気変動、万事が、浮き沈みの激しか世の中たい。
都会は都会で、昔から人も多かごたるばって、実際のところ、古くからおる人間な2・30人おれば、せいぜい1人か2人だけ。

朝んうちに誰かが死んだて思うたりゃ、そん日の夕方にゃ赤ん坊が生まるる。世の中ぜんぶ、まこて、先から見た泡ぶくんごたるふうたい。

知らず、生れ死ぬる人、いつかたより來りて、いつかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を悩まし、何によりてか目をよろこばしむる。

生まれたら死ぬ、それが人間ちゅうもんばって、基本的にゃみんな、自分がどっから来てどこさん行くとかなど、知るこたでけん。

どこさん行くとか分らんとだけん、どがん家ば建てたところで所詮は仮の住まいたい。そりばって、近所づきあいとかでストレスば抱え、見栄のためえごたごたと飾り付きゅうとする奴の気が知れん。

そのあるじとすみかと、無常をあらそひ去るさま、いはゞ朝顔の露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへども朝日に枯れぬ。或は花はしぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、ゆふべを待つことなし。

住人といい、その家といい、すべては川の泡ぶくんどたるせわしなさで変化するもので、人間なんぞ詮、朝顔の露に過ぎんとはい。

場合によっちゃ、そんなしずくが落ちた後、朝顔の花だけがきれいに残るかもしれんばってか、花は朝日は浴びればきゃー枯れてしまう。

あるいは、朝日で花がしおれたあとで水滴だけが残ることもあろうばって、そりもやっぱり、夕方までに蒸発して消えっしまう。やれやれ、たい。

およそ物の心を知れりしよりこのかた、四十あまりの春秋をおくれる間に、世のふしぎを見ることやゝたびたびになりぬ。

だいたい物心んついてから、かれこれ40年、世の中不思議な出来事ば何度も見てきとる。

いにし安元三年四月廿八日かとよ、風烈しく吹きてしづかならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來りていぬみに至る。

だいぶん昔ん安元3年（1177年）4月28日んことばって、風が強う吹いて、うるさかほどじゃった夜、8時か9時ごろになって、京都ん東南で火が出て、北西方面に燃え広がったことがある。

はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、ひとよがほどに、塵灰となりనికి。火本は樋口富の小路とかや、病人を宿せるかりやより出で來けるとなむ。吹きまよふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如くすゑひろになりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすらほのほを地に吹きつけたり。

火の勢いが強うして、最終的に、朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省ちゅう立派な建物群が、一晩で焼け落ちてしもた。

出火場所は樋口富の小路で、病人が臥せった家から出火したそうにある。風が強かったもんだけん、とにかく燃えて、火炎が巨大な扇のごて燃え広がった。

強風のため、離れた場所におっても燻さるるし、火に近ければ炎が地面ば焼くごて吹きつけた。

空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じてあまねくくれなみなる中に、風に堪へず吹き切られたるほのほ、飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ移り行く。その中の人うつゝ心ならむや。

すさまじか勢いで舞い上がる灰に炎が映って、辺り一面が真っ赤じゃった。さらにその炎が風にちぎれて、かるがると隣町てろん隣まで飛び広がるありさまで、そんな中ば逃げ惑う人々は、生きた心地やせんじゃたらだ。

あるひは煙にむせびてたふれ伏し、或は炎にまぐれてたちまちに死しぬ。或は又わづかに身一つからくして遁れたれども、資財を取り出づるに及ばず。七珍萬寶、さながら灰燼となりనికి。

煙に巻かれて倒れたり、炎に吞まれて焼け死んだ者も多かったはずばって、我が身ひとつでギリギリ逃げきった人も、家からは何も持ち出せでにゃ、財布や着物はもちろん、お宝の数々もみな灰になってしもた。

そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち、三分が二に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛のたくひ邊際を知らず。

被害総額は見当もつかんばって、こん火事で公家屋敷が16棟も焼けたっちゅたあ。ましてほかん連中、庶民の家がどがしこん被害じゃったか、想像もできん。

京都中ん三分の2ぐりゃが焼けた上、死者は男女あわせて數千人、焼死した馬や牛などは數えだしたらきりがなかつた。

人のいとなみみなおろかなる中に、さしも危き京中の家を作るとて寶をつひやし心をなやますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

こがんで、人間生活なんか何の頼りにもならんもんばって、こがんで危険な京都市内に大金かけて家ば建て、あれこれと心配事ばかり増やすとは、まこて、無理無駄の極みじゃなかかと言いたくなるわけですたい。

 [トップページへ戻る](#)